



LE CORBUSIER

MORIMURA KAWAMURA SEMINAR

06/06/07

OBARA AKIFUMI

KUJIRAI RUMI

KUWABARA SHO

SATO NAO

LE CORBUSIER

森村・川村ゼミグループ発表
2006年6月7日 レジュメ
小原・桑原・佐藤・鯨井

はじめに

ル・コルビュジェが世界の建築や都市計画に与えた影響は非常に大きい。彼自身が建築や都市計画という中に託したものはいったいどんなものだったのか。彼を代表する「輝く都市」という構想の中にその答えはあるのだろうか。今回は彼自身に焦点を当て、彼の構想に迫っていきいたいと思う。

1. 『輝く都市』までの経緯

ル・コルビュジェ: 1887年10月6日、
時計製造で知られるスイスのラ・ショー・ド・フォンに生まれる。
ラ・ショー・ド・フォン: 合理的な格子状の工業都市。

コルビュジェと建築

彼の作品には2つのタイプがある。

- ・大地に密着し、内部を重く閉ざしこむ 伝統的な建築。初期の作品に多い。
- ・内容を軽やかに包み込みつつ外に剥き出す サヴォワ邸(1931)が代表的。

故郷にいた頃・・・計7作
(代表例)

- ・ファレ邸(1907)・・・最初の作品。装飾過多、ヴァナキュラー形式での建設。
- ・シュオブ邸(1916)・・・故郷では最後の作品。
初めて平らな屋根出現。しかし、外壁は褐色レンガ。

この時期にパリに14ヶ月滞在し、『鉄筋コンクリート』と出会う。

又その2年後の1910年にドイツへ。パウハウスの重要人物と会う。その影響もあり近代的生産技術の成果である船舶、自動車、航空機などに対する意識の目覚め、又、その後故郷で作った作品には円弧の使用が見れるようになる。

1914年・二つの着想を得る

- ・「メゾン・ドミノ」の解釈を確立する
- ・「ピロティ都市」台杭の上に建てられることを想定した都市

その後パリへ

- ・二十年代のテーマは『突出部』。またこの頃から凸部が見られるようになる。
(代表作)

- ・シトロアン(1920)・・・サヴォワ邸に見られる様な「白い箱」のはじまり。
- ・ベスヌス邸(1923)・・・窓部分が突出しだす。
- ・ラ・ロッシュ邸(1924)・・・ピロティの最初の出現。これにより、邸宅の端部分が突出。
- ・プラネクス邸(1927)・・・部屋が突出
- ・クック邸(1926)・・・近代建築の5原則が見られる。ほぼ前面ピロティ。
そして1931年にサヴォワ邸完成・・・合理主義の集結

コルビュジェと建築における考え

彼の初期の作品と20年代の作品では外観が大きく違う。そしてまた建築における考え方も、年月を経るにつれより明確になっていき、都市計画を考える上でも重要な土台となった。

・ソルボンヌ講演「建築における新精神」(1924)・・・住宅によせる自らの立場を明らかにした。

「現在の建築」は「ありふれた人間」のための「ありふれた住宅」に専心するもの。よって「住宅を研究すること」が「人間的基盤」「人間尺度」、つまり「要求」「機能」「感情」の「標準型(type)」を「再発見」することである。

住宅には二つの目的があります。住宅は、先ず第一に「住むための機械」、すなわち作業における迅速、正確さを得るために私たちに効果的な助力を供すべく定められた機械、身体のような様々な欲求を満足させるための親切で行き届いた機械です。しかしながら、住宅は次には沈黙考のための肝要必須の場でもあり、そこでは美が存在し、人間にとって欠くことのできない静逸を心にもたらず、そんな場でもあります。住宅は或る種の精神のためには美の感覚をもたらすべきだと言っているのです。(山口知之訳、『エスプリ・ヌーヴォー』)

・このように彼は年を取るにつれ、さまざまな人と出会い、経験をつみ、そして考えをより合理的なものへと昇華していったのである。

2. ル・コルビュジェの建築の特徴

「現代建築の五つの原則」

論文『新建築の五つの要諦』(1926)による

1. ピロティ

「ピロティは、建物全体を地上から持ち上げる」

- ・地面の開放 地面は動的なもの(動き、交通、また植物)に確保されるべき。静的なもの(仕事・住居)は上階に。
交通難の緩和

2. 屋上庭園

「屋上庭園は建物が占める地上の面積を取り戻すことになる」

- ・平面で作られるコンクリートの屋根に、土を敷き、その上に草を茂らせる。
湿った層によって住居が保護される・自然の世界の回復

3. 自由な平面

「自由な平面は耐力柱を間仕切り壁から分離されて達成される」

- ・屋内の分配の必要性に応じて間仕切り壁を配ることが可能
可動性・空間的造形の自由

・ピロティ(Pilotis)
= 2階以上を部屋とし、1階を柱のみにした建物の1階部分のこと。ピロティ、またはピロチ。

4. 横長連続窓

「横長行き違い窓、または水平窓が取り付けられる」

・ピロティによって建物が支えられているために、壁が耐力せずに済み、窓を最大限に拡張することができる。

部屋に取り入れられる日光の増加

室内からの風景が途切れない

5. 自由なファサード

「自由な正面は、自由な平面の垂直面への必然的投影である」

・耐力する必要が無いため、壁を自由にレイアウトできる。

壁面をガラス張りにし、日光を取り入れる。

この五原則はコルビュジエの建築「クック邸」(1926)で初めて体現され、後に「サヴォア邸」(1929)がより完成された実例を示した。

「クック邸」と「サヴォア邸」は、「シュタイン邸」と併せて「ピューリズム期の三大傑作」と呼ばれている。

・ファサード (façade)

= 建築物の正面 (デザイン) を指す言葉である (仏語に由来。face と同根)。最も目に付く場所であり、重要視される。

・ピューリズム (Purisme)

= コルビュジエも提唱の一人となった、絵画の様式。明快さ、正確さ、客観性、調和、機能美等を強調する考え方である。静物を、水平線・垂直線や明確な輪郭線を重視した、より幾何学的な形態で描写しようとするもので、機械的なものにも親近性がある。

= 純粋主義

「四つの型」

論文『住宅構成に関する4つの型』(1929)による

コルビュジエは20年代の自分の建築を振り返ってこれを発表した。

・「四つの型」の一般化のアプローチ

全体を支配する特徴が弱い

「要素の連鎖」という全体的印象の方が優先..... 第一の型

全体を支配する特徴が強い

幾何学的輪郭の効果(白い直方体)画全体を支配... 第二の型

構築体(ドミノ的骨組み)が全体を支配..... 第三の型

幾何学形態(白い直方体)が主に全体を支配..... 第四の型

1. 第一の型: 境界の無い付加型

・部分からの多様な主張に沿って接続し、それを単に併置する

・A部分がBを、B部分がCを、というようにどこまでも付加していく

・「合理的諸機能の連鎖」

・全体的な特徴づけは難しい

例: ラ・ロッシュ・ジャンヌレ邸

「輝く都市」とは、機能的でありながら、人間的であることを目指した都市。

「この計画には、パリの中心部に完全な解決をもたらすという意図はない。」By ル・コルビュジエ

それまでの(都市計画)とは、問題の部分的で小規模な改良に過ぎなかった。

そのような繰り返される混乱状態から、都市計画を(時代に即した)水準に持ってこよう、という意図があった。

問題を全体から捉えて、建築的・社会的・経済的側面から同時に扱う

結局「輝く都市」計画は非難の嵐。実行されることはなかった。

しかし緑の真只中に立つ高層ビルの姿、集合住宅...などは今日ありふれたものになっていて、彼の着想がこれ以降の都市計画に大きな影響を与えているのは確かである。なぜならこの「輝く都市」は、今までの《この場所の、今における特定の》問題を一時的に解決するためだけの都市ではなくて、これからおこるであろう問題にも先見の明をもって、多種多様で複雑なすべての都市問題をわかりやすく単純化して解決するための都市だったからである。

4. 「輝く都市」と日本

幕張新都心住宅地

・幕張の歴史

1945(昭和20年)

東京湾に残された数少ない臨海部の埋め立ては戦後すぐに始まり、政府は食料増産のための緊急開拓事業のひとつとして幕張の埋め立てを閣議決定。

その後、事業目的は中小工場用地造成に変更され、1964年、60haの造成が完成した。

1967(昭和42年)

都心部から30km圏、広大な埋め立ての可能な稲毛、検見川、幕張に計画人口24万人の海浜ニュータウン建設が計画された。経済発展と急速な首都近郊のスプロール化に対して都市を計画的に誘導し、良好な住宅地として整備することをめざした。

1972(昭和47年)

海浜ニュータウン幕張地区埋め立てに着工した。

幕張新都心計画概要

- ・事業主体 千葉県企業庁
- ・事業期間 昭和47年度～平成22年度
- ・敷地面積 522,2ha(拡大地区を含む)
- ・常住人口 26,000人
- ・就業人口 150,000人

特徴：

- ・職住の近接性を考慮
- ・高密都心型住宅地
- ・住宅地の街路網は格子状
- ・中央の一角を沿道型中層高密住宅地
- ・高層・超高層住宅地
- ・街路に面する地上階には店舗等非住居系施設
- ・緑化

都市を支配すべきよき条件

- ・秩序と清潔
- ・自然条件の復活
- ・住居地区の接近

By コルビュジエ「輝く都市」より

考察

確かにル・コルビュジエの都市計画は実現可能な構想ではなかったかもしれない。しかし、彼の『輝く都市』におけるアイデアが現代の私たちの建築と都市計画に新しい基盤をもたらしたことは明らかではないだろうか。例えば、彼の『輝く都市』を象徴する要素の一つである、緑の真只中にそびえる高層建築も日本やアメリカ、または南アメリカやアジアのような大量の人口を収容する必要のある都市では、その高層建築は多く見られるし、集合住宅もまた今日では当たり前のように存在している。彼の構想が実現されなかったとは言え、その事実だけで彼の考えが間違っていたとも言えないのはこの様に、現在の建築社会に大きな影響を与えたのは確かだからである。

そして、彼の残した功績とはまさに都市を建設する上での問題を浮き彫りにさせ、提起した点ではなかろうか。確かに彼のプロジェクトは奇抜であり、実現可能とも思いがたい発想ではあったようにも思うが、その発想は都市が抱える社会的問題を建築の面から改善しようとする新しい動きでもあった。その彼の問題をシンプルに捕らえ、立ち向かう姿勢こそが現代の建築における基盤をもたらしたのだろう。

(参考文献)

- ・ケネス・フランプトン『現代建築史』青土社、2003
- ・越後島研一『ル・コルビュジエ/創作を支えた九つの原型』彰国社、2002
- ・スタニスラウス・フォン・モース『ル・コルビュジエの生涯 -建築とその神話-』彰国社、1981
- ・八束はじめ『ル・コルビュジエ』岩波書店、1983
- ・吉坂隆正『ル・コルビュジエと私』勁草書房、1984
- ・越後島研一『建築形態論 -世紀末、ペレ、ル・コルビュジエ-』丸善株式会社、1998
- ・ル・コルビュジエ『輝く都市』坂倉準三訳、鹿島研究所出版会、1968
- ・Galerie Taisei Home Page, TAISEI Corporation, 2002 (<http://www.taisei.co.jp/galerie/>)